經濟論叢

第110巻　第5号

哀　　辞

故松井　清教授遺影および原稿

産業コンツェルン……堀　江　英　一　1
創業利得と利益留保……高　寺　貞　男　27
不生産的階級と生存競争の組織化……池　上　　惇　41
GMにおける予想制度と基準価格制度の形成……小　野　秀　生　57
個人的消費と労働力再生産の社会的性格……成　瀬　龍　夫　78

記　　事

松井教授逝く
追悼講演（吉信 肅・森下二次也・山岡亮一）
追　憶　談（田畑茂二郎・杉本昭七・関下 稔・鈴木 明）
故松井 清教授略歴・著作目録

昭和47年11月

京都大學經濟學會

松井先生とゼミ生活

鈴　木　　明

私達がゼミ生として先生よりご指導をたまわることが許されましたのは 2年と満たない短い期間でした。しかし，この期間私達は先生のポーズのない，おおらかなお人柄を通じて経済学を勉強できる機会が得られましたことを，実にかけがえのなかったものと感謝致しております。

先生のご指導のもとに，昨年は戦後の世界経済に継起した諸問題を，とくにドル危機の背景ともいうべきものを中心にゼミを進めてまいりました。今年は転換期の日本貿易を学ぼうという目標のもとに，まず山田盛太郎氏の『日本資本主義分析』を講読した後，「日本経済はクローズンシステムからオ--プンシステムへの展開をまって十全な意味で把握することができる」という先生の御指摘を受けて夏休みより貿易論に取り組み，年末をメドに論文の作成に迄進みたいと，先生と共に意気ごんでいた矢先の，突然のご逝去にただ無常を感じるばかりです。

ゼミでの先生の言動を通じて，私達は先生の物事一般に対する考え方が大変柔軟なのに驚きとともに敬意を感じてまいりました。また私達が提出するレポートに，恣意的な数字や見解が述べられている時には，すぐにこれを指摘なされて，イデオロギーに頼ろうとする姿勢をきびしく批判されました。ゼミ決議に際しても付和雷同的な傾向がある時には，一人一人が自主的態度で臨んでいくことを，強く求められました。このような

先生の真理を極めようとなさるおごそかな態度に接するにつけ，学問に精進しておられる人の独立心と謙虚さに畏敬の念を覚え，身のひきしまる思いが致しましたのは，私一人ではなかったと思います。

昨年の4月，はじめてのゼミの時に「期末試験の出来が悪すぎて，自殺しようとまで思った」といわれ，私達の勉学に対する姿勢のいい加減さをたしなめられました。この時先生がこれ程まで真剣に学生のことを考えていて下さることに，感謝の念を禁じえませんでした。このような先生の姿勢は，研究室を私達ゼミ生が自由に使用できるような場所として開放して下さったことにも，また教養部の学生を対象としたプロゼミを引き受けられていたことにもうかがわれます。私事に亘り，恐縮ですが，私がはじめて先生にお会い致しましたのも，このプロゼミでした。それは，あの学内が騒然としていた一回生の5月のことです。この時，先生は学生運動に参加することは学問放棄してよいことではなく，むしろ勉学に支えられてはじめて意味をもちうるという趣旨のことをおっしゃられたのを記憶しております。

また公的なことばかりでなく，私達一人一人の個人的な訪問をも快く迎えて下さいました。こういう時先生はアルバムを見せられながら，いままでご旅行なさった国々の実状や政治家との会話の模様など，実に貴重なお話をして下さるのでした。学界の話に触れながら，こんなことを言われたことがあります。「3Sにならないように英会話を習っておいた方がいいよ」と。「3Sとは何んですか」と尋ねましたところ，「外国の学会で，外人が日本人を評していう言葉で，日本人は英語が聞けないので silent せざるを得ず，ただ黙っているのも体裁が悪いので時々 smile しているが結局 sleep してしまうことだ」と答えられました。このように先生のお話には常にユーモアが含まれていて，とかく学者という言葉に萎縮してしまいがちな私達に対して，広く扉を開いて下さり，とてもあたたかい感じを抱かせて下さるのでした。それでついつい長居をしてしまい，先生の大切な時間を無為に費えさせて申し訳けなく思っている私達の気持を察してか，「還暦後の私の人生は，後輩の指導と実践活動にかけている」とよく言われることがありました。

このように私達を相手にお話し下さる時は，いつも笑顔を絶やさない先生でしたが，その先生の一番うれしそうなお姿を拝見することができたと思いましたのは，昨年の9月，ご自分のライフ・ワークだといわれていた『世界経済論体系』の改訂版の原稿が完成された時ではなかったかと思います。その時先生は，この本に掲載されている，奥様を想われた序文と，掲載を見合わされた詩とを私達に読んで下さり，感想を求められました。

その直後，原因不明の病に倒れられたのですが，今思えばこの時もっとゆっくりとご

養生していただけたらと残念に思うこともございます。しかし，先生は11月にはゼミに出てこられて，「もうすっかり回復したよ」とおっしゃられていたので，私達も安心致しておりました。そしてこの4月，新たに3回生を迎えてますます張りきっておられる先生を拝見するたびに，先生のご病気の記憶もほとんど薄らいでしまった程でした。今思えば，最後のゼミとなってしまった7月5日のゼミが終った夕暮，私達の見送りの中を奥様の運転なさる自動車の後ろ座席に乗られながら，「隣に乗られなくていいのですか」という私達の言葉に，「年をとるともういいんだよ」と実に楽しそうにしておられたお姿が今もはっきりと想い起こされます。

今こうして突然に，先生を喪ってしまった私達には先生といって気楽に訪ねていっては，あの豊かなご経験と深いご見識に接する機会は永久になくなってしまいました。しかし，私達はこの喪失感を抱きながらも，私達に残された日々を精一杯生きて少しでも先生のご恩に報いたいと思っております。先生，ありがとうございました。

昭和47年9月30日